深沢七郎

庶民列伝
一九七〇年一月二〇日発行
一九七四年二月二八日 二三刷
著者深沢七郎
発行者佐藤亮一
発行所株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話東京(03)二六〇局一一一一
振替東京八〇八
多田印刷、大口製本
定価六五〇円
© 1970 Shichirô Fukazawa
Printed in Japan

乱丁，落丁本はお取替えいたします

『庶民烈伝』目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『庶民烈伝』序章 …… 7
おくま嘘歌（『庶民烈伝』その一） …… 53
お燈明の姉妹（『庶民烈伝』その二） …… 67
安芸のやぐも唄（『庶民烈伝』その三） …… 103
サロメの十字架（『庶民烈伝』その四） …… 113
べえべえぶし（『庶民烈伝』その五） …… 179
土と根の記憶（『庶民烈伝』その六） …… 197
『庶民烈伝』あとがき …… 219

〈楽譜　著者自筆〉

装幀　芹沢銈介

庶民烈伝

『庶民烈伝』序章

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

庶民というものは、どんな人達だかはだいたい見当がつくものだが、どの生活からどのくらいの生活までの人達を、「庶民だ」とはっきり区別することはなかなかむずかしいことだと思う。このことで私の友人――この友人は金持の御隠居さんだから庶民ではないのだが、庶民の出身者である。上高井戸に住んでいてアパートを経営したり土地も沢山持っていて遊んでいるような生活をしている老人である。この老人のことを私は「上高井戸の旦那（ダンナ）」とか「上高井戸の親分」とかげでは呼んでいる。この上高井戸のダンナの息子さんは大学出なのだが、学生時代は勉強の虫にとり憑かれた様な勉強家で、卒業しても就職するのでもなく、家事に従事するのでもなく、遊んでいる様な生活で、洋酒と読書が趣味である。大学教授にもなれる資格があるそうである。だから庶民ではないと思う。私はこの息子さんのことを「インテリ〳〵」と呼んでいる。

このインテリ息子の説では、庶民以外の階級の者はみんな異常神経の持主だそうである。例をあげると、上高井戸のダンナの知人の職工さんが独立して工場を持つようになったそうである。製品は女のヒトが髪の毛をセットするのに使うクリップで、設備も簡単らしい。その職工さんは

毎日々々クリップを作っていたが、1人で作るより2人で作るほうが能率もあがるし、費用も少ないことになるそうである。

「それから小僧さんを2人ばかり入れて、そのうち15人もふやしましたよ」

と上高井戸のダンナは言った。

「あんなのが異常神経だよ」

とインテリ息子さんは教えてくれた。

「だから、ほかの者より以上に金を儲けようとか、ほかの者よりぬきでた者になろうとするのは、異常神経だよ」

とインテリ息子は言うのである。つまり、学校などでも、ほかの生徒より勉強して上位の成績をとろうとするものは、みんな異常神経の持主ということになるそうである。実業家が経営を拡大するという考えも異常神経だし、選挙運動などをやって政治家になるのも異常神経だし、太閤秀吉とか中国の漢の高祖などはみんな異常神経だそうである。テレビに出演して大勢の前で唄を歌いたいという考えを起すのも、作家も、映画俳優もスポーツ選手もみんな異常神経の持主だそうである。

「ずいぶん、大勢、ありますねえ、この世の中には異常神経の人達が。異常神経の人ばかりじゃアないですか」

と私は言った。

「いや、庶民は異常神経ではないですよ、庶民だけですよ」

とインテリ息子さんは言った。

「庶民と異常神経では、どちらが多いでしょう?」
と私はきいてみた。
「それは庶民の方が多いでしょう」
と横でダンナが言った。そう言われて私も気がついたことがあった。それで、
「あててみましょうか、庶民がどのくらいあるか」
と言うと、
「どのくらいありますか?」
とダンナは膝をのりだした。
「50対5、で、50人の中で5人だから10対1ですよ」
と私は言った。
「どうしてそうなりますか?」
とダンナは言った。納得がいかないらしい。
「そうなりますよ、学校なんかで1クラス50人のうち、優秀な生徒は1番から5番ぐらいまでだから、異常神経の生徒は5人で、あとはみんな庶民だから」
と私は説明した。
「ずいぶん乱暴な!」
とダンナは目をまるくした。
「ソレソレ、そういう乱暴な理論が庶民の理論だよ」
とインテリ息子が言った。(そうだナ)と私はうれしくなった。私の言うことは庶民だったの

である。庶民と言われると私はうれしくなってしゃべり始めた。私はもっと乱暴な庶民を知っているのである。

その家は製本屋で、私とは親しい交際(つきあい)である。昼飯どきに行った時だった。子供は学校へ行っていて、夫婦で食事をしようとするところだった。お膳の上にコッペパンを2ツ並べて、茶碗に朝飯の残りの冷たいミソ汁がこぼれそうによそってあって、

「いただきます」

と奥さんが言ってお膳にアタマをさげた。そこの御主人も、

「いただきます」

と言って、奥さんにつづいてお膳にアタマをさげた。奥さんは45歳だかだが、髪の毛はもうだいぶ白髪が目だっていた。御主人のアタマも松茸型に大きく禿げていて、ふたりで揃ってお膳に頭をさげる恰好は、小学生が先生の前でお辞儀をしている様である。

(凄いなア、庶民だなア、あんなコッペとミソ汁なんかにお辞儀をして)

と私はびっくりした。それから食事がすんで後をかたづけて、夫婦はむき合って紙をおるのである。たしか、なにかの出版物の製本の仕事だったと思うが、竹の指輪をはめて、紙を2ツに折って、竹の指輪でスーッと折りめをつける仕事だった。夫婦は働き者で、私が遊びに行っても仕事をしながら話をして、決して仕事の手を休めたりしないのである。これは私もそんな風に話したりするのが好きで、私などもときどき手伝いながら話し込むこともあった。働き者の夫婦は仕事を始めても決してテンポは乱れない。朝から夜おそくまで働いて、そのあいだに仕事の手がのろくなるようなことは決してないのである。それ程御主人も働き者だし、奥さんも一所懸命に仕

事をするのである。が、御主人の方は奥さんよりかなり年が上だし、奥さんの方は肥りぎみの肉つきだが、御主人の方はかなり痩せていた。せいも低いし、顔も頭も耳も指も小さい上に痩せていて、骨と皮ばかりの様な身体だから、奥さんと一緒に仕事をしていればやはり仕事がのろくなるときもあるのである。私が知っているその時は、きっと、そんなことはめったにないことだが、御主人は紙をおりながらいねむりをしたのだった。両手に紙を持ったまま、ちょっと、御主人の手が止った。このいねむりに私はすぐ気がついて、

（ここだナ、こんな時だぞ、奥さんがアノ手を使うのは）

と私は下をむいて坐って、紙をおっている奥さんの腰の方を注意して見ていた。そうすると、やっぱり私のカンは当ったのだった。奥さんの股のところが少しずつ開いてきたのだった。これは御主人の仕事の手がのろくなったときに奥さんが御主人を激励するために使う手であるということを、私は同業者の製本屋から聞いていたのだが、私の見たこの時は奥さんの股はかなり拡がって、

「ハッ」

という御主人の溜息の様な、気合いの様な声が洩れた。ハッと、神様でも拝むように頭を下げて御主人の手はまた激しく紙をおりはじめた。

「ジャーッ〳〵」

と紙をおる音は力がはいって、また夫婦の手は一所懸命に働いているのである。

「庶民ですねー、それは」

と上高井戸のダンナが言った。

「そうでしょう、庶民だと思いました」
と私も言った。
「いや、そんなのは庶民じゃアないよ、そんなに働いて、金をのこすのは」
と横でインテリ息子が反対した。
「いや、金などためませんよ、その製本屋さんは」
と私はよく知っているので説明した。その製本屋はいつも金の余裕などはないのだった。
「どうして、金がのこらないですかねー」
とダンナが首をかしげていた。私もそのことでは不審に思っていたが、いつだったか、やはりその製本屋へ行った時だった。祭日で仕事は休みで奥さんは出掛けるところだった。髪をセットして、銘仙の着物と羽織も揃いのもみじの模様で、下駄も新しく、珍しくオシャレになっていた。
「ずいぶん、キレイですね、今日(きょう)は」
と私は驚いた。仕事のときの恰好しか知らないので(こんな恰好をすることも知っていたのか)とびっくりしたのだった。これは随分失礼な私の考えだが、この綺麗にシャレた奥さんを眺めていると、(ああ、誰でも、どんなヒトだって、綺麗な恰好をしたいのだナ)と気がついた。そうして、(俺は、こんなことさえ知らなかったのだナ)と驚いたのだった。
「どこへ行くですか?」
ときいてみた。
「小石川へ、ちょっと」
と言うのである。小石川というのは奥さんの実家である。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com